

あびこの文化

発行人 大洋 美崎 大野
我孫子市 高野山
250-23
04(7182)
0861

あけましておめでとうございます

会長 美崎 大洋

平素は当会の活動に格別のご協力をいただき

ありがとうございます。

会員の皆様、コロナ禍の中での新年をどのように迎えられるでしょうか？

一年を振り返って

昨年は新型コロナに振り回された一年でした。

新型コロナウィルスの感染拡大を受け、政府は4月7日、緊急事態宣言を発令しました。市民に外出自粛を呼びかけ、遊興施設や商業施設など幅広い業種に休業を要請、繁華街や駅から人の姿がめっきり減りました。街ではマスクやアルコール消毒液などの品薄が続き、病院では入院病床や医療物資の不足が問題となりました。緊急事態宣言は5月下旬に全面解除されましたがその後も混乱は続きました。

社会的距離（ソーシャルディスタンス）の確保やマスク着用などの「新しい生活様式」が浸透し、自宅などで勤務するテレワークをはじめ、感染リスクが高まるとされる「3密」を回避する動きが広まりました。

政府は、一律10万円の給付や、企業に支給する「雇用調整助成金」の拡充などを盛り込んだ緊急経済対策を実施。7月には、苦境に陥った観光業界を支援する「Go To トラベル」事業も始まりましたが、8月と11月には再び感染が拡大、12月には毎日のように新規感染者数が過去最多の水準となり、「Go To トラベル」事業も年末年始の全国一斉停止に追い込まれました。国内の感染者は12月には累計23万人を超え、死者は3000人を超えました。

新型コロナの猛威は昨夏に行われるはずだった東京五輪・パラリンピックを直撃し、1年の延期が決まりま

した。手賀沼を渡り、我孫子市内を走る予定だった聖火リレーも無くなりました。

9月、連続在職が7年8か月余と歴代最長に及んだ安倍首相の後を引継ぎ、菅義偉総裁が第99代の首相に就任しました。

面白い話題もありました

棋聖戦五番勝負で7月、藤井聡太七段が、渡辺明三冠に勝利し、タイトルを奪取したのです。17歳11か月での戴冠は最年少記録となったとともに、8月には王位も獲得し、史上初の「10代二冠」を達成し大きな話題になりました。

12月6日、小惑星探査機「はやぶさ2」から分離されたカプセルが豪州の砂漠に着地、地球と小惑星リュウグウの間を6年で約52億キロメートル飛行する探査ミッションを達成。日本の宇宙探査の技術力を世界に知らしめました。カプセル内には小惑星から採取の石や砂が確認され、その分析結果も期待されます。

嘉納治五郎先生之銅像建立

当会の話題に目を転じますと、4月15日、天神山緑地の別荘跡地に「嘉納治五郎先生之銅像」が設置されました。本来であれば我孫子市を始め関係者とともに除幕式によりお披露目をする筈でしたが、コロナ感染拡大中ということもあり、残念ながら、除幕式は中止となりました。一方、除幕式が行われなかったことで特定の日の特ピックから

日にちを特定しない出来事として、その後一か月間、新聞の地方版やタウン情報誌などが順番に記事として掲載、PRしてくれました。いずれにしても銅像建立が予定通り達成できたことは改めて喜ぶべきことと感じています。また今回の計画は我孫子市や我孫子市民を始めとした多くの方の善意と好意による協力によって達成したとい



えます。改めて感謝とともにお礼を申し上げます。昨年は新型コロナ発生と言う特別な年であったことから、後年、銅像を眺める度に「あのコロナ騒ぎのあった年にこの銅像が建つのだ」と印象深く思い出すことがあるのではないのでしょうか？

当会の行事もコロナ禍により大きな影響を受けました。毎年5月に開催していた「総会」は一堂に会することとは止めて書類での開催となり、「文化講演会」も中止となりました。定期的に開催していた「放談くらぶ」「史跡文学散歩」も中止、若しくは延期せざるを得ませんでした。それでも7月には「史跡散歩」を復活させ「銅像見学を中心とした治五郎ゆかりの地を巡る」、11月には「柳田国男の青春の地を訪ねる」というテーマでそれぞれ実施しました。また10月には「オビシヤの謎を解くー二本足のカラスの的からさぐるー」、12月には「沼辺の史跡今昔・・・」のテーマで「放談くらぶ」を開催し貴重な講演を聴くことができました。それぞれマスク着用を始めとしたコロナ対策を十分に施しての開催でした。

唯一2か月おきに実施している「短歌の会」プロジェクトは中断することなく続けました。通常使用している会場がある期間、使用禁止となりましたが、「密」にならない代替会場を手当てし凌ぎました。

「四十年誌」の編纂について

既にお知らせしておりますが、当会創立40周年を記念して現在、「四十年誌」編纂の作業中です。正直申し上げて会員の投稿による参加は少ない感じがしますが、会員以外の当会に興味を持って下さる団体や個人からの投稿もあり、充実した内容の記念誌が出来るのではないかと期待しております。

今年も引き続き新型コロナ感染防止に留意が必要と思われまます。年末に急浮上した変異種コロナやワクチン開発などの情報にも気を配りながらの会の運営になります。会員の皆様には「新しい生活様式」を確実に実行しながら、「他者への理解と配慮」を持って日常を過ごして頂きたいと存じます。

(寄稿) 我孫子と柳宗悦と日韓研

千葉県日本韓国・朝鮮関係史研究会
事務局長 三橋 康孝

私たちの研究会(以下「日韓研」と略称)は、日本と朝鮮半島の歴史を学びながら、両国の友好親善を促進することを目的に、おもに千葉県内の社会科教員や市民が中心となつて、一九九七年に設立した研究会です。これまでに学術シンポジウムや講演会、講座さらに日韓の青少年交流事業などを進めてきました。日韓研は活動の一環として、我孫子の地に「柳宗悦・兼子夫妻の碑」を建てようと活動してきました。その試みは実現できませんでした。かわつて貴会が、夫妻と浅からぬ縁の「嘉納治五郎」の像の建設を成し遂げられたことに深い喜びと尊敬の念を禁じえません。おめでとうございます。

振り返れば二十年前になりますか、私たちと我孫子の縁は我々が刊行した一八二頁の『千葉のなかの朝鮮』(明石書店 二〇〇一年)から始まりました。その本の第八章に本会の初代事務局長 橋本洋一氏が執筆した「手賀沼から朝鮮を見つめた柳宗悦」という文章があります。この文章に触発されて、「日韓研」の何人かで三樹荘を訪れ、「存命だった家主の村山正八氏から話を伺い、我孫子と柳夫妻と朝鮮文化・白樺派・民藝運動の深いかかわりを実感したのです。私は成田で生まれ育ちましたが、さほど遠くもない我孫子にそんな歴史があるなど全く知らず、驚きました。その後、会員の中で、この歴史を広く知らせるために、三樹荘の付近に碑を造ろうという話が立ち上がり、別組織の「柳宗悦・兼子の碑をつくる会」を設立し、手探りの活動が始まりました。

十年以上の活動の中で、中心に据えたのが市民の方々に柳宗悦・兼子夫妻のことを知っていただくための我孫子での講演会・青年交流会の開催です。一時は我孫子の県立高校に赴任した仲間もおりましたが、教師の転勤は不可避で、研究会メンバーに我孫子に住・在勤者はおりませんでした。

記録を辿ると以下ようになります

二〇〇八・八・二三 講演会①

演題「柳宗悦と朝鮮―我孫子からの発信」
講師 清泉女子大学教授 中見真理 氏
(於 中央学院大学 日韓研と共催)

二〇〇八・十一・二四

柳宗悦・兼子の碑をつくる会設立総会
(於 我孫子市民プラザ)

二〇一〇・八・二二 講演会②

演題「一九二〇年五月の柳宗悦と兼子」
講師 美術史学会会員 韓 永大 氏
(於 アビスタ)
我孫子カルチャー&トーク・日韓研と共催

二〇一一・二・一九

「日韓草の根交流会」我孫子「トークとフィールドワーク」
韓国留学生と我孫子市民との交流会
我孫子カルチャー&トーク・日韓研と共催

二〇一一・七・一八 講演会③

演題「柳宗悦の思想 その面白さ」
講師 白樺教育館館長
初代白樺文学館館長 武田康弘氏
(於 我孫子市民プラザ)
我孫子カルチャー&トーク・日韓研と共催

二〇一二・七・二九 講演会④

演題「道く白磁の人」の歩みと想い」
講師 李 春浩 氏
(於 アビスタ) 日韓研と共催

二〇一三・八・一七 講演会⑤

演題「柳宗悦と我孫子 人や物との出逢いを巡つて」
講師 日本民藝館学芸部長 杉山享司 氏
(於 アビスタ) 日韓研と共催

二〇一四・七・二六 講演会⑥

演題「知名度と男女差の不思議」
柳宗悦・兼子夫妻の例をきっかけに」
講師 国立音楽大学名誉教授 小林 緑 氏
(於 アビスタ) 日韓研と共催

二〇一四・①一〇・五 ②十一・二〇

及び ③二〇一五・二・一五

中見真理 著 『柳宗悦』(岩波新書) の読書会
(於 アビスタ)

二〇一五・八・二二 講演会⑦

演題「父柳宗悦の遺したもの」
柳宗悦の父柳宗悦の人生と業績」
講師 元白樺文学館館長 竹下賢治 氏
(於 我孫子市民プラザ) 日韓研と共催

二〇一六・①二・二三 ②四・二三

柳宗悦 著 『朝鮮人を想う』(朝鮮の友に贈る書)の読書会

結局、碑を造ることはできず、後日、海津さんのご紹介で教育委員会に三十万円弱を寄附し(二〇一五年)、柳夫妻の顕彰などに使つて頂きたいと伝えたのに留まりましたが、我孫子の地でこれだけの実績を積み上げられたのは、我々にとつて誇りですし、協力して下さった我孫子の皆さんにはいくら感謝しても足りません。

私自身のことでは、この活動に関わることにより、色々な人と出会い、様々な知識や経験を得ることができました。

そのひとつとして、「白樺派」をより深く知ったことがあります。白樺派の運動は文学史上軽視されがち(上流階級の子弟の楽観的・理想主義的な文学遊び?)ですが、柳と我孫子に集まった人々を通してみると、とんでもない、現代の日本文化に多大な影響を与え続けている広範な文化運動であると認識すること

とができました。その白樺派の萌芽が見られたのが我孫子だったのです。

もう一つ、大きかったのは民藝運動を知ったことです。柳と関わっているうちに、民藝の思想や感性に知らず知らず感化されていた自分を感じます。各地の民藝館、沖繩の「やちむん」の里、大分の小鹿田焼の村、木喰の作品展、浜田庄司記念益子参考館等々、旅に出ても、民藝と縁の深い場所を訪れることが多くなりました。

そして朝鮮との関わりで言えば、柳を通して浅川巧を知り、小説「白磁の人」を読み、彼の故郷の資料館を訪ねて感銘を受け、映画「道く白磁の人」の制作に日韓研として少しだけ協力できたこと、映画化の発案者である李春浩氏を我孫子に呼び出したことも大きな財産です。

活動を通して貴重な出会いがありました。我々と我孫子をつなぐハブの役割を担ってくださった海津いいな氏をはじめ、「我孫子の文化を守る会」前会長三谷和夫氏や前副会長の越岡禮子氏、故宮本瑛夫氏、前市長の福島浩彦氏、前述した講師としてお招きしたキラ星のような研究者の方々、等々。さらには、日本民藝協会による夏季講習会の会場が我孫子になり、市民の皆様と手賀沼クルーズも一緒にできたという機縁もありました。

このように、私や日韓研の仲間にとつて、「我孫子」は忘れがたい、大切な場所になっています。

追記もし、鹿兒島の知覧「特攻記念館」を訪れる機会がありましたら、建物の前の通りに建つ大きな横長の石碑を見て下さい。表面に「アリアランの歌声遠く母の国に念ひ残して散りし花々」と刻まれ、裏面には「平成十一年十月二十三日 千葉県我孫子市 村山祥峰 江藤勇」と刻まれています。朝鮮人特攻兵を慰霊した碑だと思われませんが、この村山祥峰こそ、三樹荘の家主であった故村山正八氏です。朝鮮を愛し人道主義をモットーとした柳夫妻の精神が遠い九州でも受け継がれているのです。

〔特別寄稿〕「山下清展」を観て

文化庁文化審議会元専門委員

萩原 法子(市川市在住)

我孫子市市制施行50周年記念事業「山下清展」を観た。同展では「芸術家・山下清」と「人間・山下清」をキーワードに、約140点の作品に加え、氏のエピソードや資料を展示していた。「長岡の花火」や「自分の顔」など、山下清の代表的な貼り絵、ペン画、油彩や、ドラマなどでお馴染みだった「放浪中に使用したリュックサック」などの資料も公開。特別公開の我孫子ブースでは、昭和17年から22年までの約6年間、我孫子駅構内でお弁当を販売していた弥生軒のために描いた作品など貴重な作品が並んだ。その中には初めて目にする作品も多かった。特に清が八幡学園で作成したものは今までもあまり観たことがなく新鮮な感じを持った。

しかしすべての展示を観終わって感じたことは「山下清を発見、世に出した式場隆三郎の姿や影がまったく見えないこと」だった。実は「山下清展」の開催前の11月14日に練馬区立美術館での「式場隆三郎 脳室放射線」展を観ていた。この展覧会は式場の足跡を200点もの作品・資料を通して網羅的に紹介したものであり、山下清の作品も数点は展示されていたが、清との関係などは詳細には触れられていなかった。そのため、「山下清展」には式場隆三郎の清に対する想いなど様々に語られているだろうと期待していた。しかし広範な展示場の中に式場が出てきたのは、「式場先生と一緒にゴッホの墓に行つた」という清の日記の一片所だけであった。

あまりにも期待外れで、「なぜ？」という疑問が拭い去らなかつた。現在、山下清の作品は、清の甥・山下浩氏の「山下清作品管理事務所」に所蔵されている。今回は、こちらの所蔵作品のみの展示であった。展示数の多さから式場についての言及には至らなかつたのであろう。折角この度、我孫子での大々的な展示だったので展覧会を補足する意味で、山下清を語るうえ

でどうしても欠かせない式場隆三郎について述べてみたい。

式場隆三郎について

式場隆三郎(明治21年7月2日新潟県中蒲原郡五泉町・現五泉市生まれ)は新潟医学専門学校(現在の新潟大学医学部)を卒業し、静岡脳病院院長などを経て、昭和11年千葉県市川市国府台に精神病院である式場病院を設立した。風光明媚な国府台の地で、彼は「暗いイメージの精神科に明るさを取り入れ、より文化的で和やかな空気が感じられるように」という想いで、芸術の潤いがあふれる空間づくりを志した。その想いは、広大なバラ園の造営、近代的な病棟の建設などに結実し、その後の日本の精神医療界に大きな一石を投ずることになった。



式場バラ園での清と女優関千恵子(ひめゆりの塔など)出演映画のロケの日 萩原秀三郎撮影(昭和30年代)

白樺派との交流

式場は早くから雑誌「ホトトギス」などを愛読し、学生時代に柳宗悦を知り、生涯にわたって「私の芸術に関する恩師」と仰いだばかりではなく、自分の娘さんの名づけ親にもなつてもらっている。宗悦が「式場君の趣味は甚だ多面的だ。医者の方は別として、文芸のこと、美術のこと演劇のこと、科学のこと何でも対象になる。だから益々仕事があふえる。ふえると益々本領が発揮される。こんな型の人はずいぶん少ない筈だ」と評している。正にその通りで、展示されていた長崎の鐘の拓本を見て、永井隆の『長崎の鐘』の出版をしたことや、初期の草間彌生を支援したり、岸田劉生、安井曾太郎、高村光太郎、三島由紀夫、東郷青児、滝沢修、小林秀雄、奥山儀一郎といった多くのかたがたとの交

流を知り、人脈の広さに驚嘆した。文芸の世界に憧れた彼は文芸や芸術創造活動と人の精神的な問題とのかわりに関心を持ち、民藝運動に初期から参画、「白樺派」の作家たちや芹沢銈介、バーナード・リーチ、富本憲吉らとも親交を結んでいる。式場邸（現存）の設計には、宗悦や濱田庄司、河井寛次郎が携わっており、いわゆる「民藝建築」の代表作となった。玄関には会津八一筆「榴散楼」の額が掛かっている。

現在市川市では、この式場邸を登録有形文化財にするため、筆者も含む文化財保護審議会での検討や視察に訪れたりしている。

式場が、ゴッホに関心を持ったのは、明治43年に武者小路実篤や志賀直哉らによって創刊された文芸雑誌『白樺』からで、診療業務のかたわらゴッホ研究に取り組み、ゴッホ研究者、美術批評家としても知られている。先日観た練馬での展覧会にも、欧米で集めたゴッホの複製画が33点も展示され、圧巻であった。東京タイズ社長や歌舞伎の守田勘弥の後援会長、日本ハンドボール協会会長、永井荷風夫人・藤蔭静枝さんの舞の後援会会長、日本医科芸術クラブの会長、三省堂から創刊された『科学』の初代編集長なども務めている。

式場隆三郎と山下清の出会い

昭和11年、式場隆三郎が八幡学園の顧問医となり、同年山下清と出会う。

八幡学園は、昭和3年、久保寺保久氏が市川市の自宅を開放して開園した。施設名の「八幡（やわた）」は、創設時の施設所在地名に由来。「踏むな、育てよ、水そそげ」の標語のもと、当時社会的に虐げられていた障害者に対し、愛情をもってその自発的成長を促すという方針をとり、自由な生活と学びの場を提供した。また福祉という言葉もない時代に、全国で8番目の知的障害児施設として開園された。その中で、重視したのが創造的能力の発掘、育成だ。創設者の久保寺保久は、『大きな遊び』こそが児童に許容し、かつ奨励する教師の心構えである」とし、「遊び」のための用

具、材料を用意した。当初から、読み書きの他、図工粘土細工・クレパス・クレヨン・エンピツ画・貼り絵、園芸などの科目を取り入れた。

山下清はアル中の父から、遺伝性の精神薄弱の素質をうけ、幼時の重い消化不良にかかったことが原因で軽い吃音にもなった。知能が遅れ、12歳の時（昭和9年）八幡学園にあずけられた。学園で清は、貼り絵に非常な興味を示し、造形の才能が開花する。

山下清と貼絵

山下清が入園した昭和9年頃、八幡学園では手工の一つとして「ちぎり紙細工」をやらせていた。子供たちは色紙で山や家や木などの形を画用紙にはりつけるのに骨を折っていた。ひとりでは形をなさないので先生が手伝ってやり、はさみで切ったり、指でちぎったりして貼り付けるのである。これはやがて「貼絵」と呼ばれるようになり、昭和10年頃には、八幡学園の特色ある課目の一つとなった。しかしこれらの子供にははさみが危ないということで、指だけでやらせることになつてしまった。

彼はこの貼絵に興味を持ち、熱心にやり続けた。彼は先生から教わった手法に自分の工夫を加えてどんどん独自の貼絵を作るようになった。母の語るところによると、幼い時から二、三銭の小遣いをあげても菓子を買わずに切抜絵を買って遊んでいたらしい。尋常一年生の頃、虫を捕ってきたては絵を描いていたという。友達とは遊ばず独りで虫を捕っては描き続けた。

昭和15年、清は突然学園から逃げ出し、放浪を繰り返す生活に入る。全国を歩き回り、見たもの、体験したことを、日記に書いた。実際の放浪で山下は、ほとんど絵を描いていない。旅先で見た風物を自分の脳裏に鮮明に焼きつけ、実家や八幡学園に帰ってから自分の記憶によるイメージを描いていた。山下は映像記憶力が抜群で、見た風景を長い間覚えていられた。これは、清がサヴァン症候群だったのではないとも言われている。

式場を有名にしたのは、「裸の大将」として売り出したこと見し、保護者兼プロデューサーとして売り出したこと

であろう。山下清作品集を何冊も刊行したり展覧会を開いたり、一緒にヨーロッパ旅行に出かけたりもした。山下清の初の個人画集『山下清画集』昭和30年6月新潮社を編集し、以後、式場の生前に刊行された全ての山下清の著作に編集、執筆等関わっている。昭和31年3月以降は日本各地で山下清作品展に尽力、同展は北海道から九州まで約50カ所、5年間にわたって開かれた。



(上) 山下清(左)と式場隆三郎



(下) 山下清画「式場先生」。式場は清と日夜一緒にいた。式場邸にもよく来た。上下の写真とも『炎の人』より転載

式場の山下清論

式場は山下清作品の展示や作品集を出すことに清に関しての文章を寄せている。すなわち「山下清が「白痴天才」であるが故に優れた絵画的な記憶力」を持つことを紹介しているのである。次の文章はそのひとつの例である。

「不遇な幼時の生活は彼を粗暴にし、八幡学園へ入った当初までつづくのだが、やがて貼絵に没頭するにいたって、性情はとみにおとなしくなつた。彼は一見、従順な性格である。人にいわせれば、素直にはいはいという。しかし、実際はなかなか頑固で、容易に自説をまげない。決心したことは、きちつとやる。孤独に慣れたのか、人懐っこいところはない。頭が大きく、少し猫背で、表情に乏しい。一見して、だれでも、知能の低いことがわかる。そして、子どもっぽい。三十四歳の現在でも、まだ一六、七の少年のような印象をうける。概して無口で、一緒にいても自分から話しかけるようなことは少

ない。」

式場はまた「山下清の人と作品」の中で清が書く日記について次のように述べている。

「文章と表現」清にはずっと前から、日記をつける習慣があった。放浪の旅の後で、必ず書く。その文体は句読点がなく、「ので・ので」と終りまで一つの文章が続く。文体は彼の絵のように克明な描写で、彼のどのもりのように、同じ言葉をくり返していく。いわゆる「しゃべり言葉」で、こつこつと書きすすめる。したがって清の人柄が、そのまま表現されていて、思うがままに書いていくのである。この素朴で飾らぬ文章が、実に面白く、魅力をもたせる。清の絵におとらぬ文章の面白さは、東京タイムズに連載された放浪記で、ひろく世間に知られた。しかし、何といつても句読点のない文章は読みにくいので、句読点を入れて発表された。

清の文章におけるその内容と表現は、その絵画的作品と一脈通じるものがある。見たままを批判を加えずに、素朴に表現する。そして彼の十八歳の時の手記も、三十歳の手記も、スタイルはほとんど変わらない。清の絵は、余白をいかすということはやらない。初期の物には、稀に空白をのこしたのもあったが、その後にはびつちりと一面に貼りつぶすか、塗りつぶしてしまふのが大部分である。この克明なやり方が、文章にもあらわれている。彼は紙に余白のあるうちは、かきつづける。日記は必ず二ページ書いて、過不足は少しもない。十枚の原稿紙を与えれば、十枚びつちり書く。清は体験したこと、見聞したことをそのまま文章にする。乏しい語彙で、せいじつばいの努力をしてかく。この偽らない真実性がまた素朴で、美しく、読む者に好感を与える。いわゆる文章道からいったら、無技巧で、幼稚なものかもしれない。しかし、このむき出しの描写法は、新しい現代文学の表現に興味をもつ人々に一つの示唆を与えたようだ。清の文章には、なまなましさがなく、タンタンたるものに変貌する。文体はこつこつしていたり、くだくだしくて読みやすくないが、読んだ印象は後味がよい。この不思議さは、やはり清の表現のたくまなよさによるのであろう。清はおそ

らく四十になつても、五十になつても、十六、七歳のときと同じスタイルで書いていくにちがいない。清は「永遠の少年」である。知性が少しも邪魔しない。この若々しさが絵にあらわれ、文章にもあらわれている。それにまた、内容が常人の経験しないこと、経験しても恥ずかしくて書けないことを、平気でかいている。泥くさい、それでいて、もつと正直で、ナイーブな心情のあふれたこの放浪日記に、わたしたちは「大人の子ども」とでもいふべき、清の正体をみる思いがする。」

実際の山下清の日記を見てみよう

昭和30年9月に後樂園の新しい遊園地「式場隆三郎が清を連れて行った時のもの。ノートに六頁にわたる、鉛筆でかいてあり、原文のまま一字も訂正しないで紹介されている。(式場隆三郎『山下清の人と作品』)

「しきば先生と東京遊びに行った事」

「油絵具で花火の絵の色をぬつて居た時みや子先生が来たのでみや子先生が昼からしきば先生が来て一しよに東京へ行くんだからすぐ行く支度をしてくれと言はれたのですぐ昼飯を食べてから体をふいてしやつとさるまたとずぼんをはきかへて居る中しきば先生が来て花火の絵を見て居るのでしきば先生が写生をする道具を持って行けと言はれたので写生の道具を持ってからしきば先生と一しよに行くと、この4倍ほどある文章の最後まで句読点なく一気に続く。」



写真は後樂園の式場隆三郎と山下清
『山下清作品集について』より転載

式場隆三郎記念館設立に向け式場隆三郎は、「自宅を記念館に」という遺言を残して

昭和40年11月67歳で亡くなる。

自宅とは前述したように柳宗悦、浜田庄司、河井寛次郎が共同で設計し、様々な民芸活動家が関わった家。昭和14年に竣工された直後に見学会があり、座談会が開かれた。その際に寿岳文章は「民藝理論を最も高度に実現させた建物」と話し、「民藝見本家屋」との言も聞かれた。

現在は孫の式場隆司氏が院長であり、日本民芸館の役職にもついている。祖父の想いの実現に向けて進まれている。しかし前述したように、隆三郎の人脈のとてもない広さから、書簡の多さや民藝運動の人々のコレクションなど未整理のものが沢山あると聞く。

平成27年に市川で行われた、名誉市民式場隆三郎没後50年記念企画展「炎の人・式場隆三郎や昨年練馬や広島での式場隆三郎の展覧会、また令和2年復刻された『二笑亭綺譚』(注)の編集など様々に関わっている式場隆三郎記念館準備室職員山田真理子さんが着々と資料の整理をされている。近い将来、式場邸が国の登録文化財になり、式場隆三郎記念館として公開されるであろう。その目を心待ちにしている。

(注)二笑亭とは、昭和初年、東京の深川に存在したある人物が建てた住宅。その人物は関東大震災後、徐々に神経に支調をきたしたが、症状のすすむにまかせ、十余年の間、自由な資力で建築を行った。迷路のような複雑な建物であった。

式場は「精神病理学の上からも珍しい資料であり、美学や建築学の方面でも幾多の問題を含む」ことから『二笑亭綺譚』としてまとめた。本作は、式場が83年前に執筆したものだが何度も復刻され、時代を超えて読み継がれている作品。

参考文献

山下清画集 付属資料『山下清について』

式場隆三郎 1956

『炎の人 式場隆三郎―医学と芸術のはざままで―』

展覧会図録 2015

『月刊 いちかわ 9』

いちかわ人インタビュー第47回 1996
式場隆三郎「脳室反射鏡」展 パンフレット 2020
『民藝 特集 式場隆三郎邸にみる民藝運動の建築』
2015

あびこだより 93号

志賀直哉の「流行感冒」とスペイン風邪

村上 智雅子

世界中がコロナ禍の中、日々感染数は増えて変異したコロナウイルスまで確認され、予想外の事態の中で令和三年は明けました。

今から百年前の大正時代、同じようにスペイン風邪が猛威を振るつたことがありました。

ちょうど志賀直哉が我孫子に住んでいた大正七年、我孫子にも流行性感冒が流行ってきました。この流行性感冒はスペイン風邪と同じですが、当初は症状はそれ程でなく呼称もまちまちで、志賀直哉は「流行感冒」と題して身辺小説を書いています。

作品は大正八年「白樺」十周年記念号に発表されました。物語は、当時の我孫子での流行性感冒の状況と家族とお手伝いさんを巡る人間模様をさり気なく描いています。

同作は昨年の朝日新聞「天声人語」十月二十日でも取り上げられ、感染症を巡って志賀家の人々の「右往左往の日々は良質なルポルターージュのようである」と紹介されています。

また与謝野晶子なども子供達が被患し、「流行性感冒の床から」と題した一文を寄せたりしています。テレビはなく新聞もそれ程普及してなかった時代、大変な状況であつたと思います。

そうした中で、志賀直哉は家長として厳しく流行性感冒に対応し、家庭内の人間模様と我孫子の町と人々の様子をありのままに書いています。

今まで、この作品は日の目を見ない地味な作品でしたが、このコロナ禍で脚光を浴びています。この時期、「流行感冒」を鑑賞する事は、意義深いと思います。当

日は、朗読で原文を聞き、味わいます。是非、お出で下さい。(放談くらぶ(2月6日(土)にて講演予定)

第139回史跡文学散歩 参加報告

「柳田國男の青春の地を訪ねる」

芦崎 敬己

令和二年十一月十四日(土)、快晴の天気の下で、九時半過ぎにJR成田線布佐駅改札口に集合したのは、我孫子の文化を守る会の史跡文学散歩に集合した男女十三名の方々です。

今日は、文化を守る会の役員の戸田七支さんのガイドで「柳田國男の青春の地を訪ねる」と題して、我孫子市布佐と利根町を散策するイベントです。

私にとつての柳田國男は、学生の頃に「遠野物語」を読んだではなく、目にした程度の知識です。戸田さんの説明を一生懸命に聞いて、地元に住んだ著名人のことを少しでも理解しようとの意気込みだけで参加しました。

丁度、このイベントの前にケーブルテレビのヒストリーチャンネルの番組「THE歴史列伝」で柳田國男を取り上げていたので、私は録画してこっそり予習をしました。しかし、事前知識で知れば知る程実際の様子や現物を現地で知りたくなりました。特に徳満寺の「間引き絵馬」や小川家の土蔵で神秘体験をした祠の中の「不思議の玉」は、興味が尽きません。

ここで文化を守る会のお知らせや当日のガイド資料等から、柳田國男と布佐や利根町を結び付ける情報をほんの少し紹介すると、日本民俗学の創始者で、民俗学の父と呼ばれていた柳田國男は、明治八年(一八七五年)、飾磨県神東郡辻川村(現：兵庫県神崎郡福崎町辻川)で生まれ、十一歳のときに地元辻川の旧家三木家に預けられ、その際に膨大な蔵書を読破する非凡さを現したそうです。十二歳の時には、医者を開業している長男の鼎(かなこ)に引き取られて茨城県布川(現・利根町)に住みました。生地でも貧しかったのですが、生地とは異なつた利根川の風物や貧困にあ

えぐ人たちからも強い印象を受けたと言われ、その後の民俗学の礎になりました。

さて、散策のスタートは、布佐のナリタヤの駐車場から国道三五六号線を歩きました。国道脇にある大正時代の政治家で元衆議院議員の榎本次郎右衛門(第十五代)邸の銀杏が色付き、黄金に映えていました。

次に柳田が旧制一高時代、布佐に移つた長兄宅を休みの度に訪れ、布佐で知つたら若き女性を詩や短歌で多数読んだ「いね子」の実家に寄りました。今でも子孫と思われる方が住まわられていて、玄関脇から路地を通つて裏庭を抜け、続いて、いね子の眠る勝蔵院墓地へ向かいました。墓石は二〇〇年余り経過し苔むしていますが、何処となくもの悲しさが感じられました。

当時、柳田は文学を志して、親友の田山花袋と競うようにしていましたが、ある時ばかりと文学の世界から離れてしまった経過に、いね子との悲恋があつたとの戸田さんの説明に力が籠つてきました。戸田さんは、このいね子について花袋の小説などから布佐の鮮魚商に身を寄せ、結核により十八歳で他界した娘だと推測しています。結核であることを生母、柳田の先輩の岡田武松と何とも淡い恋だつた印象が残りました。

続いて、直ぐ脇の高台の竹内神社に向かいました。ここの神社の狛犬は、雌だそうで、その違いは狛犬の後ろを回ると気が付くそうでした。気になる方は、現地に赴いてご覧になって下さい。

高台に続く石段は、男坂、女坂とあつて、男坂の石段は結構急な坂でした。竹内神社は、毎年九月に行われる例大祭が伝統ある祭りであり、神輿や山車が町内を練り歩き、多くの見物客で賑わうので有名です。ここの神社には、石の白露戦争英文記念碑が建立されていますが、長く土中に埋もれていたものを掘り返して立て直したものだそうです。●の石碑にも柳田國男の名前がありますが、「柳田國雄」と字を変えてあります。ここにも悲恋で布佐に思い出を残したくなかつた柳田の気持ちがあるのではと言います。

その後、近くの寿司店で昼食を摂りました。会場で全員が簡単な自己紹介をしましたが、午前中も歩き

ながらお話しして皆さんそれぞれ打ち解けてきました。自己紹介の中で、文化を守る会に入会したいと言う方もいらして、早速入会して頂きました。



午後は、会の役員が用意した三台の車で利根町へ移動し、「間引き絵馬」のある徳満寺に向かいました。徳満寺は、境内の木々の間から眺める利根川の景色が素晴らしく、茨城百景に選ばれている所です。徳満寺の間引き絵馬は、現在は客殿の廊下に掲げられていますが、長い間は廊下

ではなく外の軒下でしたので、傷みも進んでいます。しかし、母が赤子の口を塞いでいる様子は、今でも十分に恐ろしさが伝わります。柳田國男が少年時代にこの絵馬を見て、当時この付近の農村の貧困と風習を知ったことは、後の民俗学者に繋がる大きなインパクトを与えた要素になったものと思います。

最後は、利根町立柳田國男記念公苑に車で移動しました。柳田國男記念公苑は、少年時代を過ごした旧小川邸宅の母屋と土蔵を再現したものです。体温計での入館チェックを行い、門を潜り庭から土蔵に向かいました。

土蔵の前には小さな祠があります。柳田少年はその中を確認したくて祠の前面の石の扉を開けます。すると、そこには奇麗な玉が入っていて、フーツと興奮し、妙な気持ちになって、見上げて青い空に星が幾十も輝いているのが見え、突然ヒョドリが「ピーツ」と鳴いて空を通り、その声で人心地が付いたということでした。



また、当時、土蔵の中には、赤松宗旦の「利根川図志」がありました。利根川図志は、赤松宗旦という布川の医者が、安政五年（一八五八年）に利根川流域のことを調べ上げた本で、柳田はこの本を自由に読んで

いたということです。



今回の散策では、柳田國男の青春時代の足跡を辿りましたが、國男が利根町で不思議な体験をしたり、後の民俗学を起すことに繋がる読書体験をしたり、文学を諦めることになった悲恋を経験したことを立体的に知る機会になりました。

（プロジェクト報告）
百人一首を楽しむ会（番外）

美崎 大洋

今月の歌（恋の歌）

（その4）

忍ぶれど 色に出でにけり わが恋は

物や思ふと 人のとよまで

（040）

【現代語訳】

心に秘めてきたけれど、顔や表情に出してしまったようだ。「恋の想いごとでもしているのですか？」と、人に尋ねられるほどになって。

【語句】

【しのぶれど】心に秘めてきたけれど、の意味。【色に出でにけり】恋愛感情が顔つきに出ることを示す。【ものや思ふ】恋について想いわずらうこと。

【作者】

平兼盛（？〜990）光孝天皇のひ孫・篤行王の三男で、臣籍に下つて平氏を名乗り従五位上・駿河守となった。後撰集の頃の代表的歌人。赤染衛門の父という説もある。三十六歌仙の一人。

「拾遺集」の詞書。960年に村上天皇が開いた「天曆御時歌合」で詠まれた。「忍ぶ恋」の題で同じく百人一首の壬生忠見の「恋すてふ」の歌と優劣を競い合った。この二首は、甲乙つけがたい名歌のため、判定に困ったが、天皇がこの歌を口ずさんだことで勝ちとなった。

（その5）
恋すてふ わが名はまだき 立ちにけり

人知れずこそ 思ひそめしか （041）

【現代語訳】

「恋している」という噂がもう立ってしまった。誰にも知れないよう、心ひそかに思い始めたばかりなのに。

【語句】

【恋すてふ】「てふ」は「といふ」がつづまった形。【わが名はまだき】「名」は世間の噂や評判の意味。「まだき」は「もう」という意味。【立ちにけり】「けり」は今初めて気付いた感動を表す助動詞。

【作者】

壬生忠見。生没年未詳、十世紀半ば。百人一首にも歌が残る壬生忠岑の子供で、平安時代に栄華を誇った村上天皇の時代に活躍した歌人。詳細経歴未詳。

（その6）

来ぬ人を まつほの浦の 夕なぎに

焼くや藻塩の 身もがれつつ （097）

【現代語訳】

松帆の浦の夕なぎの時に焼いている藻塩のように、私は来てくれない人を想って、恋い焦がれているのです。

【語句】

【まつほの浦】兵庫県淡路島北端にある海岸の地名。【藻塩（もしお）】古い製法で、海藻に海水をかけて干し焼いて水に溶かし、煮詰めて塩を精製した。【夕なぎ】夕風、夕方、風が止んで海が静かになること。【身もこがれつつ】火の中で身を焦がす海藻（藻塩）の姿と、恋人を待ちこがれる少女の姿を重ねた言葉。

【作者】

権中納言定家Ⅱ藤原定家（1162〜1241）。平安末期の大歌人藤原俊成の子として生まれ、正二位・権中納言まで出世した。新古今集、新勅撰集の選者として

て有名。「小倉百人一首」を選んだ。叙情的な「有心体（うしんたい）」という表現スタイルを作った。今月の雑学 忍ぶれ……

とどむれどよそに出にけりこむすこほ
うちにあるかと人のとふまで
わが恋は袖やたもとをおしあてて
忍ぶとすれど腹に出にけり
忍ぶれど時に出でにけり買ひ過ぎは
バアゲンやあると人の問ふまで
恋すてふ……

めせといふわか菜の声は立ちにけり
人しれずこそ春になりしか
「わか菜の声」は、七草粥の若菜行商人の呼び声
恋しさに忍びてまがき立ちまよひ
君知れず土手を帰る裏登道
無駄買ひの病はまたも憑きにけり
人知れずこそ店に出でしか
来ぬ人を……

定家どのさてもき長くこぬ人と
しりてまつほの浦の夕ぐれ
釣舟で酒の肴にまづ鯉かれい
やくや藻塩の身もこがれつ
来ぬ人をまつ井の浦の夕飯（ゆうめし）に
焼き塩鯛の身を焦がしつ

楚人冠俳句「序跋詩歌集」より 杉村楚人冠

新年の俳句（各年の俳句をまとめて）

富士が嶺の雪むらさきに初明り

初東風や揚州は鶴の舞ふ日なり

揚州：中国江蘇省中西部の河港都市。揚子江に連絡する大運河沿いにあり、古くから水運の要地。鑑真ゆかりの大明寺がある。

初詣鳩羽はたいて米がとちる

正月の學者の棲の晴着かな

双六や餅と蜜柑と賭けてあり

藪入りのわりなく暮るゝ別れかな

第二十六回短歌の会（最終採択の一首） 十一月二十四日実施

百万本のバラが咲いたよ見の限り
いいえその花コスモス畑

大島光子

仏壇の前ではしゃぐは曾孫たち
孫知らぬ父百になる今日

芦崎 敬己

閉ざされし鉄の扉のその奥の
夫焼く音はわれを焼く音

伊奈野 道子

「穏やかに日を過ごしてね」と言いながら
今日は問題告げ来るむすめ

納見 美恵子

「大恋愛したことないの」と友の言ふ
顧みればわれまた同じなり

美崎 大洋

ひたむきに生きて悔いなし人泣かしし
罪あることも我泣きしことも

藤川 綾乃

命綱幹に結びて山柿の
実の熟したる枝切らむとす

三谷 和夫

晩秋の二階に夫の碁を打てる
姿想ひて厨房に立つ

飯高 美和子

伊勢イネのすまあのまどに灯のともり
秋明菊の白々と咲く

佐々木 侑

晩秋の利根川の辺をはるばると
志賀の健脚偲びて歩む

村上 智雅子

今後の行事予定

□「放談くらぶ」

日時 2月6日(土) 14時～16時

会場 南近隣センター（けやき8階）第1会議室

講師 村上智雅子氏（当会副会長）

演題 「志賀直哉の『流行感冒』とスベイン風邪
— 志賀作品とスベイン風邪の実状を語る —

（6ページ）「あびこ」より93号参照ください

◎参加費 会員無料 非会員三〇〇円

申込みTEL&FAX七二八五〇六七五 佐々木まで

□プロジェクト「短歌の会」予定

第二十七回短歌の会

日時 1月26日(火) 13時30分

場所 けやきプラザ 10階小会議室

白樺文学館の展示情報

『白樺』創刊100年記念 市制施行50周年記念

「我孫子の風景展」

期間 2年11月11日(水)から3年2月28日(日)

内容 志賀直哉たち白樺派が去つた後の我孫子は、原田京平を中心とする春陽会の若手画家たちが風景を描く時代を迎えます。原田京平の風景画などを展示。

編集後記 今回は二つの寄稿がありました。「日韓研」の

三橋氏は紹介を兼ねての寄稿。嘉納治五郎銅像建立基金への寄附もありました。萩原氏は10月に「おびしや」の講演をして貰ったばかりで、「山下清展」と白樺派にも触れた式場隆三郎論▲今年の干支は「辛丑（かのとうし）」。「丑」は本来「紐（ちよう）」という漢字とされ、「万物が固定された状態にあること」を表し萌芽が種子の中に生じて今から伸びようとする時期」を示す▲動物に当てはめると「牛」になる。牛の特徴は、『粘り強さと誠実さ』で古くから酪農や農業で人々を助けてきた家畜であり、大変な農作業も最後まで地道ながらも手伝ってくれた働き者です。そのことから粘り強さや誠実さが特徴とされるようになりまして▲今年はコロナ禍の推移を注視しながら一歩ずつ地道、確実に進んでいくこととなります。（美崎）